

M-GTA 研究会 Newsletter no.4

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、筒口由美子、木下康仁

第 26 回 研究会の報告

【日時】 2004 年 5 月 29 日(土) 13:00～18:00

【場所】 立教大学(池袋キャンパス) 5 号館 5302 教室

【参加者（敬称略、順不同）】

滝原香（富山医科薬科大学）、倉石真理（富山医科薬科大学）、塚原節子（富山医科薬科大学）、矢吹道子（虎の門病院）、千葉京子（日本赤十字武蔵野短期大学）、岩瀬裕三子（東京大学）、小野美喜（大分県立看護科学大学）、川波公香（長崎大学）、安藤悦子（長崎大学）、鈴木直樹（埼玉大学）、福島哲夫（大妻女子大学）、隅谷理子（大妻女子大学）、鳩山淳子（佐賀大学）、藤田奈緒（佐賀大学）、藤田智子（お茶の水女子大学）、菅野摂子（立教大学）、掘越敦子（日本女子大学）、永田梨恵（日本女子大学）、坂本智代枝（大正大学）、長住達樹（群馬大学）、荒井昭子（名古屋市立大学病院）、伊藤和子（愛知江南短期大学）、鹿野裕美（宮城大学）、西能代（千葉大学）、酒井都仁子（長南町立西小学校）、岡田加奈子（千葉大学）、塚本みどり（東京大学）、山崎浩司（京都大学）、佐川佳南枝（西川病院）、林葉子（お茶の水女子大学）、水戸美津子（自治医科大学）、青木信雄（龍谷大学）、小倉啓子（青梅慶友病院）、深田耕一郎（立教大学）、佐瀬恵理子（東京大学）、山崎登志子（広島国際大学）、塩塚優子（青梅慶友病院）、江口賀子（西九州大学）、神馬征峰（東京大学）、埜崎健治（目白大学）、宮坂友美（富山医科薬科大学）、木下康仁（立教大学）、の計 42 名

【世話人会報告】

1. 10 月 2 日（土）公開研究会は、島根県出雲市のビッグハートで 13 時～17 時までとする。募集人数は 60 名、会員の参加は 20 名、の計 80 名を予定している。準備は島根県立看護短期大学の石橋先生と佐川さんを中心メンバーとする。

M-GTA の講演は水戸先生にお願いする。発表は 2 題で、①看護系の発表は石橋先生と佐川さん、②心理系の発表は小倉さんと木下先生のペアセッションで、全体的なスーパーバイザーと質疑応答などを木下先生にお願いする。全体の司会は林（葉）さん、開会の挨拶は青木先生にお願いする。公開研究会のチラシ作りは水戸先生の院生の学生にお願いする。

2. 研究会の出席者にシール式の名札に名前を記入してもらい、胸に貼ってもらう。
3. M-GTA、GTA および関連の質的研究法に関するキーワードを解説した小冊子（基本

用語集)を作成する。関心のある人(5名くらい)でまとめる。林さん、佐川さんが中心となってまとめる。来年の総会の時には配布できるように進める。

4. 次回の研究会は7月31日、次々回は9月11日の予定。

5. M-GTA による掲載論文のある会員は、抜刷一部を水戸美津子先生まで郵送する。その後、水戸研究室にてコピー、会員に郵送してもらう。送付先:

〒329-0498 栃木県河内郡南河内町大字薬師寺3311-159

自治医科大学看護学部 水戸研究室

(文責 宮坂)

【総会】

総会で提出された第1号議案から第9号議案はすべて可決された。(総会資料参照)

~~~~~

## 【研究報告】

### エイズ流行拡大期における日本の若者の性文化に関する研究

—地方A県高校生のコンドーム使用・不使用に関する相互作用プロセスの  
修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる分析—

京都大学大学院 医学研究科/人間・環境学研究科 山崎浩司

## 1. 発表の要旨

- 1) **研究テーマ**: 地方A県に住む男女高校生はなぜ・どのようにコンドームを使うのか、使わないのかを明らかにし、彼らの性文化の理解を深め、性の健康の増進に寄与する知見を得る。(今回の発表は、女子のみに限定)
- 2) **現象特性**: 女子高校生のコンドーム使用・不使用にまつわる、女子高校生と性交渉相手ならびにコンドームとの相互作用プロセス。
- 3) **M-GTA に適した研究か**: 知見は、性教育やエイズ・性病予防の一環としてコンドーム教育を実施するヒューマンサービス領域で活動する人々に役立つ。
- 4) **分析テーマへの絞込み**: 不使用は「コンドーム不使用の定着化プロセス」に、使用は「コンドームの使用と入手のプロセス」に限定。
- 5) **データの収集法と範囲**: 性経験のありそうな女子高校生を仲間単位でリクルートし、フォーカス・グループ・インタビューを8グループ、計41人に実施。
- 6) **分析焦点者の設定**: コンドームをほとんど使用していない者、時々または常時コンドームを入手・使用している者。
- 7) **カテゴリー生成**: ①不使用: コアカテゴリーを中心にコアプロセスを設定しサブプロセスと分化(18の概念から8つのカテゴリーを生成)。②使用(分析途中、現在概念が12個)

- 8) **方法論的限定の確認**：①疫学的なエイズ予防介入研究の一環として実施されたため、分析開始時にデータ収集はすでに終了（追加データなし）。②論文としてまとまる分量にする目的とデータの特性から、男女、使用・不使用に分割。
- 9) **論文執筆前の自己確認（①研究のオリジナリティと②援助の視点）**：特に①〈**貧妊体質信仰**〉（膣内射精を一定期間くり返したが妊娠しなかったことから、自分は妊娠しにくい体質なのだと信じるようになること）や〈**お守りコンドーム**〉（財布にいられておくとお金が貯まるので、入手するが使わない可愛いコンドームのこと）といった新概念は、従来のエイズ/性感染症/望まない妊娠の予防教育を再考させる。②援助の視点としては、(1)未経験または経験の浅いうちに予防教育を実施する必要性、(2)コンドームのデザインはかわい過ぎると入手しても使用しない可能性、(3)男性が女性側に惚れ込んでいる関係性を機に教育すると使用に切り替わる可能性、(4)入手を困難にする環境の改善の必要性、といった視点が得られた。

## 2. 質疑応答とコメント

- 不使用の定着化のプロセスとあるが、不使用の開始についての分析はしなかったのか？→分析したがデータの性質上、定着化に重点を置くことになった
- 実際には使用と不使用はそんなに固定化された現象ではないと思うが、その揺らぎを示したほうがよいのではないか？→そのとおりで、最終的には使用と不使用、女子と男子といった個別の論文を統合して、その揺らぎを描き出したい
- この研究の知見を踏まえて、現時点で考えられる具体的な予防教育の改善案はあるか？→具体案は今のところないが、男女の影響関係とコミュニケーションに重点を置いた方策が重要だと考える
- （高校生のコンドーム使用に関する）先行研究にはどのようなものがあるのか？→国内で行われたものはほとんどないが、オーストラリアを中心にいくらかある。ただ、それらには本研究のオリジナルな概念など見受けられない。
- 提示された結果図は、M-GTA 的でないのではないか。このような結果図を M-GTA の結果図として提示するのは問題があるのではないか。→量的研究を主体とする医学系ジャーナルに投稿予定のため、自分の希望以上に単純化せざるを得なかった。最終的にどのような結果図にするかは、さらに熟考して決定したい。
- 概念名を造語する場合、なぜその名称でなくてはならないのかを様々な角度から説明すると、査読者の納得を最終的に得られる可能性が高まる。
- （木下先生のコメント）：現象特性とは、テーマとは違った角度からの検証を可能にするもの。本研究の場合、コンドームの使用に限定されない相手との影響力関係がそれにあたる。方法論的限定では、本研究が大きなプロジェクトの一部で、制約の多い中実施されたことを、より読者に明確に提示すべき。

## 3. 感想と展望

- 数多くの貴重かつ有用な示唆をいただきました。ありがとうございました。共同研究の難しさが浮き彫りになった感がありますが、どんな形であれ公表し、知見を社会化するのが重要だということを再認識いたしました。今後は女子のコンドーム使用に関する分析を完成させ、男子（個人インタビュー6人＋フォーカスグループ3組17人＝計23人）の使用・不使用に関する分析に進みたいと思います。次回にプロGRESSを発表できればと思います。重ねてありがとうございました。

~~~~~

【構想発表】

(第26回－構想発表－第1報告)

精神障害者支援関係職種による勉強会参加者の意識の変化

～精神障害者支援関係職種による勉強会開始から1年間の調査より～

目白大学大学院心理学研究臨床心理学専攻 埜崎健治

<発表要旨>

チームアプローチや連携の必要性が認められているにも関わらず、チームアプローチが進んでいかないという現状がある。このような現状の中、チームアプローチは必要であるがどのようにチームアプローチをすればいいのかわからないと感じている精神障害者支援関係職種（OTR、Ns、CW、CP等）による合同勉強会を1年間開催する。勉強会を通じて参加者の意識がどのように変化をしていくかを明確にすることで、チームアプローチの一助にしたいと考える。

<質疑>

- ・意識の変化ではテーマが大きすぎるので分析テーマを絞り込む必要があるのではないかな。
- ・15回程度の勉強会で、参加者の意識の変化がないのではないだろうか。
- ・インタビューでしてきた内容でテーマを絞るのではなく、事前に分析テーマを絞り込んでおくことが必要ではないだろうか。
- ・勉強会参加者（研究者）がインタビューをする場合と第三者にインタビューを依頼する場合のメリット・デメリットを明確にすることが大切ではないだろうか。
- ・「参加者にとって勉強会がどのような場であったのか」を分析テーマにすることもいいのではないだろうか。

<感想>

木下先生をはじめ M-GTA の皆様の色々なご指摘をいただき、大変感謝しています。

1年前に勉強会の立ち上げを検討する中で、勉強会を修士論文の研究テーマにすることを決めました。その時は、卒業をするための研究を書くのではなく、自分の納得のいく研

究をしたいと考えていました。構想発表することで、いつのまにか卒業をするための無難な論文を書こうとしている自分に気がつくことができました。

今回頂いたたくさんのご指摘をもとに、研究デザインを練り直したいと思います。これからもよろしくお願い致します。ありがとうございました。

(第26回—構想発表—第2報告)

養護活動におけるケア／ケアリングに関する研究

～児童と養護教諭の互恵的關係による成長と自己実現のプロセス～

宮城大学大学院看護学研究科

鹿野 裕美

<報告の要旨>

養護教諭の行う養護活動において、「ケア」という概念は非常に重要である。また、ケアを出会いとした、児童生徒と養護教諭のケアリングの関係性は、ともに成長し自己実現する互恵的な相互関係として成立するとされている。本研究では、このプロセスを明らかにするため、①質問紙調査（自由記述式）②面接調査を行う予定である。

<質疑要約>

① 養護教諭の「ケア」をどのように考えるか？

→本研究では、専門的なケアではなく、毎日の子どもたちとのかかわりをケアとする。

② 分析テーマの焦点化について

→キーワードがいくつもあり、絞りきれしていない。が、関係性をプロセス化したい。

③ 何をもって関係性の構築とするかがあいまいか。

④ 質問紙調査により、語られた情報からひきだしていくことが重要。

⑤ 教師—生徒の関係性について

→養護教諭として自分が成長したとを感じるような、思い出に残る、子供との関わりを聞いていきたい。

Advice

「研究」と研究者との距離間を大切に。

ケア／ケアリングは分析テーマとしては大きいので焦点化をしっかりと。

キーワードは互恵性か。「大きなすそ野から、針の穴を通すような気持ちで。」

<感想>

自分の「思い」をひとつの「研究」とするために、ここまでも生みの苦しみがあったことは事実ですが、この発表を行って、「研究」をつくりあげていくために、どう向き合っ

ていけばよいのかということ、学ばせていただいたように思います。また皆様からご助言いただいたことを考え合わせると、分析テーマについても、ひとつの道が見えてきました。

これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

(第26回－構想発表－第3報告)

父親の家事・育児行動におけるバランス調整のプロセス

～第一子出生後の共働き家庭の父親について～

佐賀大学医学系研究科修士課程看護学専攻

母子看護学講座2年 藤田奈緒

<報告要旨>

従来わが国においては、母性という言葉には重い価値付けがなされ、家事・育児をするのは主に母親の役割であり、父親は家庭外で働くことにより、生活基盤を支えるという役割をとってきた。しかし近年、核家族化・共働き世帯の増加・女性の高学歴化による社会進出の促進などに伴い、1999年には厚生労働省から男女共同参画社会の必要性が打ち出され、家庭内での父親の役割は重要視され、父親の家庭生活への参加が求められている。

今回の研究では現在増加している共働き家庭の父親が仕事と家庭生活との間でどうバランスをとろうとしているのかというプロセスを明らかにしたい。父親への理解を深めることにより、母子看護において健やかな家庭作りへの援助のあり方や方向性を考えていく一助となると考える。

<質疑内容>

- ・ 社会学としても成り立つテーマである。どこで母子看護学との接点があるのかをはっきりさせる必要がある
- ・ 研究テーマを『共働き家庭の父親の第一子出生後の家事・育児行動における適応プロセス』としたほうが良いのではないか
- ・ 「バランス調整」というのは1つの結果なのではないか。プロセスとして出てくるのだろうか
- ・ どういう現象として分析の中でとらえていこうとしているのか
- ・ 調整がとれているケース、とれていないケースをピックアップして調査していくのか
- ・ 家事と育児というのはそれぞれ異なる要素なのではないか。

<感想>

今回の研究会では構想発表をさせて頂き、また貴重なご意見やご質問を頂き有難うござ

いました。2 回目の参加で発表の機会を与えて頂き、本当に感謝しております。研究テーマの看護学における有用性について再度検討し、内容について再度見直していきたいと考えます。皆様のご助言を活かし、論文完成に向けて努力していきたいと思ひます。今後とも、よろしくお願いいたします。

(第 26 回－構想発表－第 4 報告)

クリティカルケア領域における家族の心理的危機プロセス

佐賀大学医学部医学系研究科

基礎看護学講座M2 鳩山淳子

< 報告の概要 >

研究内容：患者のクリティカルケア（重症集中ケア）領域への入院を機に家族自身の生活がどのように変化し、どのような危機的状況を体験したのか、またそのような状況において様々な人々（医療者や患者など）との直接的な関わりを通して心理的危機状況から回避（または逆に危機に陥る）に向かったのか、家族の心理的变化のプロセスを家族の体験から明らかにすること。

- ① 家族は、初めて患者のクリティカルケア領域への緊急入院を経験した。
- ② 家族は患者にとってキーパーソンである。
- ③ データ収集施設は、救急指定病院で集中治療室を有している病院である。
- ④ 患者の入院時から家族の様子を観察し、毎日ノートに記録する。（主に患者の状態や家族の言動など）その後、同意の得られた家族にインタビューを行う。

< 質疑の要約 >

- ・危機とはどういう意味か。研究テーマに具体的に書いたほうがよい。
- ・患者の設定をどうするのか。
- ・この研究で得られる知見は、どういう人たちへの看護の示唆になるのか。ICUなどでは、それがわかってもそれどころではないのではないか。
- ・いつの時期の家族を対象とするのか。危機を終えた家族か、または今危機を迎えているまたはこれから危機を迎える家族か。

< 構想発表後の感想 >

初めて発表をさせていただき、皆様から貴重なご意見をいただきました。再度検討し、いただいた規定の研究計画書にそって、メーリングリストで送らせていただきます。これから本調査に入っていきますが、がんばっていききたいと思っておりますので、宜しくお願いします。ありがとうございました。

.....

【次回の研究会】

日時： 第 28 回、7 月 31 日(土) 13:30-18:00 立教大学(池袋キャンパス)

場所： 後日、お知らせします。

なお、第 29 回は 9 月 11 日(土)の予定です。場所は未定

【編集後記】

- ・ 第 4 号のニューズレターです。発表者の皆さん、ご協力ありがとうございました。通常のパターンと若干異なり、研究報告 1 例、研究構想発表 4 例でしたが、充実した内容の研究会でした。
- ・ 研究報告はできるだけ 2 例はほしいので、敷居を高く感じずにまずは事務局の佐川さんに相談してください。最も適切なタイミングで報告していただけるよう、事務局もアドバイスをしていきます。皆さんの研究をサポートしていくのがこの研究会の目的ですので、一歩踏み出す勇気を期待します。
- ・ 前回同様、今回も出席者が多く 42 名でした。お互い顔と名前が分かるようにと、今回から名札シールを始めました。とてもよいアイデアだと思います。
- ・ 総会へのご協力もありがとうございました。青木先生が挨拶でお話になりましたが「進化し続ける研究会」にしていきましょう。今年度は基本用語集の編集、作成など、いくつか新しい試みがあります。総会についての詳細は添付資料をご覧ください。
- ・ その他、研究会の運営やこのニューズレターについてのご意見がありましたら、ML あるいは事務局(佐川、宮坂、木下)宛てにお寄せください。

(木下記)